時を越えて

槻乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
時を越えて

【Ｎコード】
Ｎ７７７５Ｘ

【作者名】
槻乃

【あらすじ】
佑之進の目の前に未来から来た男が倒れていた。
未来から来た蓮夜はなぜこの時代に来たのか、そして未来に戻ることができるのだろうか。
舞台は江戸時代ですが、時代物の要素はあまりないかもしれません。

未来から来た男

月明かりの綺麗な夜だった。
山のふもとにある家に帰ると目の前に不思議な格好の男が倒れていた。
「何者だ・・・？」
見た目の年齢は近い。死んでるのかと思い恐る恐る近寄ると息をしていることを確認できた。
「おい」
揺さぶるとうーんと唸る声がした。
「寝てるだけか・・」
しかし、このままにはしておけない。
「仕方ない」
よいしょと男を担ぎ家の中に入れた。

翌朝
「起きたか？」
「ん・・おはよう・・ございます・・？」
男は眠そうに体を起こし、そしてきょろきょろと家の中を見渡した。
「・・・どこ？」
「私の家だ」
「誰・・・？」
男は私の姿を見つけると不思議な言葉を発した。
「コスプレ？」
「こおすぷ・・れ？」
こすぷれとは何だ？
「お主はどこのものだ？なぜ家の前で倒れていた」
「・・・時代劇みたいなしゃべり方だなー」

と何かぼそぼそとつぶやいて男は答えた。
「ま、いっか。俺は藤堂蓮夜」
男は名前を名乗ってきた。
「あなたの名前は？」
続いて名前を聞かれたので答えるしかない。
「私は佑之進という」
「佑之進か。本当に時代劇とかに出てきそうな名前だなあ」
男がまた何かを言うが意味はわからなかった。
「それで・・お主はなぜ我が家の前で倒れていたのだ？」
「んー・・昨日学校から帰ろうとして・・あれ？」
一生懸命思いだそうとして唸っていたが結局、
「むう・・意味がわからんぞ」
と腕を組んで首をかしげていた。
「そうだ」
急に顔をあげ私を見た。
「何だ？」
「倒れてたってことは、君が俺をここまで運んでくれたんだよな？ありがとう」
悩んだりお礼を言ったり、気分がころころ変わる奴のようだ。
「いや、武士として当然のことをしたまでだ」
そう答えると蓮夜が次はいっそう首をかしげた。
「武士ねえ・・なあ、ここどこ？」
「だから、私の家だ」
「じゃなくて、どのあたりかってこと！地名とか」
「江戸だぞ」
「・・・いやいや」
「どうした？」
急にあわて始めた。
「今日って何年何月何日！？」
「？」

日付を聞かれたので正直に答えた。
「・・・江戸・・」
「だからそう言っておろう」
「江戸・・時代・・・」
様子がおかしい。
「もしかして、将軍って徳川？」
「何を当たり前のことをいっておるのだ？最近かわったばかりだろう？」
「・・・！！！」
衝撃を受けたのか、布団の中にうずくまる。
「蓮夜？」
「いやいや、ありえないって。はあ？うそだ、うん、これはドッキリだ！！」
「おーい・・」
布団にもぐった蓮夜は大きな独り言を言ったかと思うとがばっと布団から飛び出した。
「嘘をついても無駄だあ！俺は騙されねーぞ！！」
いきなり指をさされた。
「嘘など言っておらん」
「嘘だあ！」
何が嘘なのかがわからない。
「とりあえず、飯でも食え。そして落ち着け」
どうにか落ち着かせることに成功し、ともに朝食をとることとなった。
「かたい・・」
米を食べた感想がこれだ。
「大事な米だ。残すなよ」
「はーい」
そしてみそ汁も平らげた。
「残さず食べたな」

お腹一杯になったらしい蓮夜はじっとしていた。
「ああ・・」
そこで蓮夜から話を聞いてみるとトーキョーとかいう国から来たという。
「トーキョー・・聞かない名だな。薩摩のほうの地名か？」
「・・・えっと・・まじかよ・・」
ため息をつきながら言うには、未来の江戸のことだという。
「未来から来たというのか？」
「そうみたい」
先ほどまでとは変わって小さく苦笑していた。
「しかし・・未来ではそのような服装を？」
彼の格好はまるで異邦人の服装に見えた。
「まあ、こんな格好かな。ただのブレザーなんだけど・・」
最後の言葉の意味はわからないがこの異様な格好は彼にとって普通のらしい。
未来から来たというのは信じられない話だ。しかし、なぜか蓮夜の言葉なら信じてもいいという感じがしたのだった。

町の中にて

とりあえず最初に町の中を案内することになった。
ついでに、未来の服は目立つので着物は着替えさせた。
もともと、次の仕事を探しにも行かなくてはならなかったしいいだろう。
「まるでテレビの時代劇の中じゃん・・・」
意味がわからない。さっきから不思議な言葉を連発していた。
そして、蓮夜は
「夢じゃないんだ・・」
頬を引っ張りながら言っていた。よほど信じられないらしい。
「なあ、それって本物？」
町を歩く中、腰のあたりを指さしながら言った。
「刀か？本物だぞ」
「危ないなあ」
「丸腰の方が危ないだろ？」
「・・・そうだよなー、そういう時代だよなー」
「なんだ、未来は皆、鉄砲か？ぴすとるか？」
「ねえよ。ったく」
呆れたように言われた。
「だったら、どうやって身を守る！？」
「未来はなー、殺し合いなんてないんだよ。まあ・・殺人事件とかはあるけど・・」
「斬り合いはない・・ということでいいのか？」
「ああ」
未来は平和な世の中になっているのだろうと思いをはせていると、
遠くから数人の男たちがこっちをみて声をあげた
「いたぞ！！！」
「見つけた！！」

「何あれ。こっちに向かってくる気がするんだけど」
「私を狙っているのだ。逃げるぞ！」
「ん！？」
思わず手をひっぱり、反対側に逃げた。
「おい、佑之進！？」
「いいから走れ！」
意外と蓮夜の足は速く、うまく逃げ切ることができた。
「はあ、はあ、はあ・・・ここまで来たら大丈夫だ」
「ああ・・何だあいつら・・」
「私を探しておるのだ。すまん、まきこんで」
「それはいいけど・・何？追われてんの？」
目を丸くして聞いてきた。
「面倒事に巻き込まれてな。大丈夫だ。しばらくは来ないだろう」
「そうなのか？」
「ああ、あやつらも巡回の流れを止めるわけにはいかぬ、半刻もすればこの町からいなくなる」
「そっか」
そして、休憩と昼食のために飯屋に入ることにした。
「しかし、お前は足速いな」
「これでも学校で1番速いんだぜ」
「学校・・？」
聞いたことがある。
「この時代なら・・寺子屋？」
「字の読み書きができるのか？」
「それはもちろん」
「いいとこの跡取りとかなのか？」
もちろんそこだけが読み書きできるわけではないけれど。
「いーや、一般家庭」
そして未来の教育について話を聞かされた。
「佑之進もしかして字読めないのか？」

「いや・・読み書きできるが・・そうか・・１０年も勉強を・・・」
「義務教育だしなー。それに俺は大学行くつもりだからあと5年は学校に通うよ」
「２２歳・・？」
「うん」
未来と今の差を思い知らされる。
「蓮夜は未来から来たと言ったな」
「そうだよ」
「過去、この時世のことを知っておるのか？」
「多少は知識はあるよ」
「・・・」
「授業で習うんだ。俺日本史取ってるし」
「にほんし・・・？」
「この国、日本の歴史」
「なるほど・・」
「関ヶ原の戦いとか、本能寺の事件とか・・。これはもう過去の話だろ？」
「・・・・そうだな」
ということは未来のことも知っているのか。
「これから日本はどうなる？」
「まー・・ん・・言わない方がいいかも」
「何！？」
「だって、これで未来変わっちゃったらどうすんだよ」
「・・・そうだな」
未来を変えるわけにはいかないのか？
「でも、少なくとも俺の生まれた時代は戦もないし、戦争もないし、平和だ」
「そうなのか・・。その・・身分は？」
「ない。とはいいきれないかもしれないけど、気にするもんじゃない。家業を継がなくてはいけないということもないし、自分のした

いことをできる自由な時代だ」
「なんと！では・・・」
「何？」
「・・・その・・」
「なんだよ」
「・・・何でもない」
「？」
聞きたいことがあった。蓮夜の言葉が本当ならば、それは自分の願いをかなえられると思えることだった。
「それよりさー、巻き込まれてるって何に？」
ある程度話を終えて、蓮夜が先ほどの男たちのことについて聞いた。
「通り魔」
「はあ？」
「通り魔の犯人にされそうなんだ」
「何で？」
「最近越してきたからだ。それまで他の土地にいたし、よそ者は怪しいってことなのだろ」
そのせいで、毎日のように追いかけられている。
「佑之進君はちがうのにねー」
お茶のお代わりをつぐために、店主の女房イツがでてきた。
「そうなんですよ」
「・・味方？」
「味方もなにも、この町のほとんどの人は佑之進君が通り魔なんて思ってないわ」
豪快にイツさんは笑った。
「で、このこはお友達かい、見かけない顔だねー」
蓮夜の顔を見た。
「ええ、そんなところです」
「そうかいそうかい、ま、ひいきにしてくれよ」
そしてイツさんは真剣な顔に急になった。

「また、通り魔出たらしいよ」
「え？」
「昨日の夜だ。気を付けなよ」
「はい」
イツさんはそれだけ言うと奥に入って行った。
「通り魔か、物騒だな」
「それの犯人にされたらたまったもんじゃないぞ」
「それもそうだ」
休憩も終わると再び町に繰り出した。
「そんなに珍しいか？」
きょろきょろとする隣の男をみた。
「うん・・すげーよ・・」
牛車がいたときは、かなりのはしゃぎようだった。
「牛！馬！町！」
「・・・おーい・・」
「やべえな、まじ時代劇」
楽しそうだから放っておこう。
「ちょっと寄っていいか？」
「あ、どーぞ」
寄ったのは仕事の紹介所。基本的に用心棒で生計を立てている。
「おう、佑之進、いい仕事あるよ」
「本当ですか？」
よかった、仕事はあったようだ。
「通り魔の捕獲。これで、やつらのはなをあかしてやれ」
楽しそうに紹介人は言った。
「いいじゃん、やれば？」
「蓮夜！」
「おれも協力するからさ」
・・・なぜ、こいつはこんなに楽しそうなのだろう。
「それに、この町を案内してくれたお礼」

「そうか」
結局私はその仕事をすることにした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7775x/

時を越えて

2011年12月13日20時49分発行